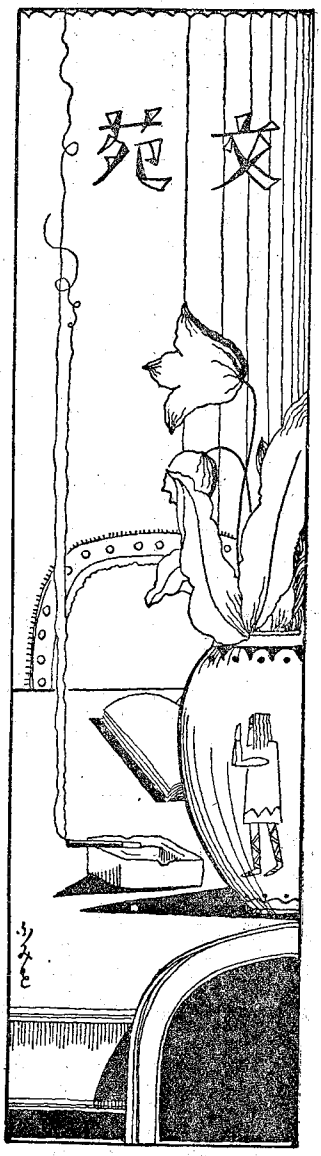

奥日光

（國立公園としての）

田山花袋

一

奥日光を國立公園にするこいふ話を此間ある新聞で見たが――たしか藤田こいふある實業家の話だつたと思ふが、あれは非常に面白いと思つた。上高地公園説などよりもぐつと多く私の心を惹いた。

つまりあの奥の湯元を中心にして、そしてその周圍の山の中を開くのである。更に言ひ換へれば、湯元まで電車を

持つて行つて、あそこを國立公園の軸にするのである。何と言つても今日の日光は俗化した。都會の人だちの遊ぶところとしてはあゝいふ風になつたのも好いかも知れないが、世界の公園としては、あれでは物足りない。もつと深いところがなくてはならない。見透さうとしても見すかすことが出來ないやうなところがなくてはならない。さういふ意味から言ふと、あの奥日光は上高地などよりも餘程多くの資格を持つてゐる。山は飽まで深い。北は帝釋山脈を隔てゝ會津に接してゐるし、西は尾瀬沼を間に挾んで越後の銀山平に及んでゐる。それに、例の山湖――笈沼、菅沼、それとは谷を異にして鬼怒沼などがあちこちに散在してゐる。冬は深雪の地、スキイの好適地、五六月になつてやつと石楠花の咲くやうな地、從つて夏の避暑地としてこれほど好いところはない。或は人に由つては、森林帶で霧が多く、輕井澤、富士見あたりの高原的空氣を持つてゐないから、身體にはあまり好くはあるまいといふものもあるかも知れないが、それは全部を見ないからで、鬼怒川の谷の中、または片科川の上流地點にはさういふ地點が澤山にある。あそこいらに行けば、何處に行つたつて、暑いなどといふことはない。

二

その話をある人にすると、

『さうだね、それは面白いね。兎に角、さうすれば、スイスあたりにまさるとも劣らない公園が出來るわけだね。第一、新しい明るいペンキ塗の電車があの戰場ケ原を通るのを見るのは愉快だらう……』

『それに、電車をあそこまで持つて行くんだつてわけはないんだからね』

『さうかね！』

『今の終點の馬返から太平まで行くのはわけはない。中禪寺から先は先づ平坦と言つても好いくらゐな勾配だから、湖畔に十間幅の道をつくれば、わけなくレイルをひくことが出來る。さうすれば、あの菖蒲濱まで湯元の湯を引いて來て、あそこを風光明媚な溫泉村とすることが出來る。そ

れを考へただけでも面白いぢやないか。』

『本當だね』

『そしてそれが湯元まで行く。そしてあそこに大きな旅館をつくる。設備さへよくしてあれば、あそこは冬だつてゐられないところではない。また戰場ケ原の三本松あたりから左に入つて、西澤金山近くまでレイルを引けば、鬼怒川の谷にも遊覽者は澤山入つて行くことになるだらう。あの金山は今では廢坑になつて、その聚落も全く墟になつて了つてゐるけれども、道路だけは開いたまゝに殘つてゐるに相違ないから、電車を引くにもさう大して面倒でもあるまい。たゞ、困ることは、土地の人の反對だよ』

『やつぱりさうかね』

『何うも人間ツていふ奴は、多くは現在に滿足してゐるものだからね。今のまゝでさへあれば好い。落付いてゐられさへすれば好いと思つてゐるものだからね。さういふ破壞的な大きな仕事には必ず反對する。そのくせ、それが完成すれば、かれ等のためにも非常に利益になることなのだけれども……。』

『さうかな』

『何しろ、現在では、奥日光ごころぢやない。馬返から中禪寺まで電車を持つて來るんでさへ、山が俗化されると言つて反對してゐるものが非常に多いんだから、やりきれないよ』

『さうかね、そんなかね？』

三

鬼怒川の谷の中にある川俣溫泉――あそこなどもさうすれば開ける。谷の底にあるやうな溫泉。その河原に湧き出してゐる湯にほつつり燈のついてゐるやうな溫泉。湯に浸つてゐるすぐ傍を鬼怒川が急瀨を成してゐるやうな溫泉。それは開いて了へば、箱根の塔の澤、鹽原の大網見たいなものかも知れないが、兎に角、西澤まで電車が出來てそこまで都會の人だちが下りて行くやうになるのは面白いと思ふ。さうすれば、あの深い谷の中にもホテル式の旅館などが出來て、やがては外國人も來て泊るやうになると思

ふ。何故ならその一支溪である湯澤には、世界にもめづらしい噴泉塔が全く榛莽の中に埋れはてゝゐるからである。

それでも今日では、その噴泉塔を口にするものが全くないではない。そのめづらしい塔を見るためにわざわざその深山の中に入つて行くものもある。それは石灰質を持つた噴泉（湯）のためにその吹口が次第に筒を成し、それが一つの小さな塔のやうな形になつて、運が好いと、三四尺の高さになつたものを見ることが出來るといふのである。かと思ふと、全く塔らしいものを見出さないやうな場合もある。つまり水が出たりすると、折角高くなつた石灰質の塔がそのためにすつかり流されて了うのである。そこへは、西澤まで入つて、川俣溫泉の方へ下りずに斜坂の腹のやうになつてゐるところをずつと湯澤へと下りて行くのである。思ふに、湯本を中心にした奥日光の國立公園が出來るとすれば、この噴泉塔などは第一の名所となるに相違ない。

四

湯元から上州へと出る道も、私だちが書生時代に行つた時分とはぐつと開けて、今では陸軍の山砲ぐらゐは通れる路になつゐるから、これなどもやがては自動車で行けるやうになるに相違ない。ある期間上ると、向うはすぐ下りになつて、やがて菅沼、笈沼のあるあたりへと行く。このあたりの靜けさと言つたら何とも言へない。避暑地としては、こんな理想的なところはあるまいと思はれるくらゐである。

それに、この湯本を中心とした四周の山の中には、溫泉脈がかなりにひろく分布されてあつて、人知れず深山の中に湧き出してゐるやうなものもかなりにあるらしい。湯澤の奥にもさうしたところが二三箇所はあるらしい。日光澤は一度洪水のために埋れたが、今では再びその所在地がわかつて來てゐるらしい。上州側には東小川の他に、まだ澤山に溫泉があるし、尾瀨沼の向う側の銀山平に近いあたりにもあるやうだ。從つていかやうにも開いて行くことが出來る。從つて實業家の藤田氏などがさういふところに眼をつけてゐることは、私を喜ばせずには置かないのである。」